

カルロス・クライバー — 永遠の現象か？

私が驚くのは、あたかも今までまだ一度も究明されたことがなかったかのように、新聞・雑誌等でクライバー「現象」が話題に上ることである。その際、残酷な父親像エーリヒ・クライバーの伝説など、好まれるようになった伝説も、ほとんどよく考えもせず好んで言い伝えられている。参考にするように再三再四言われるのが、出入りを許されないクライバー家文庫の意義の大きさである。この稀に見る芸術家を理解するためには、この文庫は必要不可欠だと言われている。

カルロス・クライバーの仕事のやり方や音楽に対する理解を、彼が編曲した総譜を手掛りに学問的に分析することが問題となるならば、その通りかもしれない。但しそうなれば、伝記の目的をはるかに越えて行ってしまいうだろう。もっとも、少なくとも私の著書が出版されて以来、カルロス・クライバーが楽譜の資料において何を尊重したかが、概ね知られるようになった。クライバー「現象」を解読するには、それよりはるかに多くのものが必要だった。すなわち彼の本質の深みへと、前に押し進むことが問題だったのである。もちろんここにおいても、未知の文庫資料がさらなる貴重な知識を提供してくれるであろう。しかし私が入手できた多数の文書、およびエーリヒとカルロス・クライバーが、個人的な手紙や対話において示した交流の喜びによって、人間として、また芸術家としてのクライバーに深く迫ることができた。

私の著書を厳密に読まれる方は、このテーマに関して全てを見出すであろう。クライバーは他の星から来た人間や音楽家などではなかった。彼が際立ったのは、その音楽的な驚くべき天性の才能であった。その才能は自ずと花開こうとしたと同時に、若い頃に父エーリヒ・クライバーによって、決して平凡なものでは我慢できないと決意する中で、形作られたものである。これは厳しい仕事をもってしか成し得ないということを、カルロ

スはやはり父から学んだのである。

クライバーは楽譜を、最大限に注意しながら研究し修正し、書き込みや型破りの運弓法をもって手を加えた。彼はリズムの取り方と精密さに対して、また感動的なテンポと詩的な深みに対して、天才的な勘があった。

作品の音を作者の意図するように響かせることは、カルロス・クライバーにとって最も奥深い要求であった。そのために彼は生き、働き、オペラやコンサートの日常お決まりの仕事に対して執拗に戦ったのである。彼はこの目標、彼の眼前に浮かぶこの理想を達成することに、ほとんど絶望することがたびたびあった。この理想によって、彼はグスタフ・マーラー以来ただ一人、本当に創造的な指揮者になったのである。そして彼があのようにたびたび誤解され、あるいは常軌を逸していると非難された行動様式や、徐々に隠遁していった事実も、それによって説明されるのである。

全てにおいて、クライバーの本質が決定的な役割を果たしているのはもちろんである。彼は知性が高く、敏感で、きわめて快活で、自由に思索し、完全主義的で、自己批判的な人間で、他人にも全てを要求した。そのため彼は、殻を破れずに時間が過ぎ去るのが辛く、とくに年齢が進むにつれて、そもそも生きるのが辛くなった。彼の火花を散らす気性、しばしばほとんど尽きることのなかったエネルギー、自発性、個人的な莫大なエネルギーの放射、その言葉や音楽の想像力をもって音楽家たちに音楽に対する新しい理解を紹介し、彼らを動かして最高の成果を上げさせる才能、堂々たる風貌、美的な指揮の型がなければ、彼は楽譜台でこうした並外れた働きを成し得なかったであろう。

クライバーが示したテンポと強烈な解釈は、彼の中で燃え上がった火の結果であり、演奏において電圧が感電させるように解き放たれた結果であった。すでに初期の時代にあって、彼は聴衆をそのように魅了したのである。

クライバー「現象」は多面的であり、彼の青少年期と父親を抜きにしては、まず理解できない。彼にとって神聖な楽譜や、オーケストラやアンサンブルとの妥協なき仕事ぶり、時にほとんど何かに取り憑かれたような完成への衝動、仕事への決意、お決まりの仕事に対する戦い、創造的で感動的な力、理想主義、気性、個性、授かった才能、音楽に対する愛と音楽に捧げた人生。この全てが、彼の音楽家としての比類なき働きと偉大さ、彼の天才的才能を形作るのである。そしてその才能をもって、彼はあのようにたびたび聞かれた作品を全く新しく響かせ、人々をうっとりさせたのである。

しかし、音楽がクライバーの頭の中で理想的に響いた様は、現実の現象かもしれず、永遠に彼の秘密として残るであろう。